

遙かなる風雪

最終回

24

実録・柴田音吉洋服店

全土を覆う国民服——ヤミも物資隠匿もせず……



現在の柴田音吉洋服店（内部）

第2次大戦勃発の翌昭和16年には国民服令が公布され、国民服制定。やがてあのカーキ色が全国を覆った。それはもはや、洋服ともいえないただの「衣類、でしかなかった。

整理を続けていた柴田音吉商店は、ラシャ部、洋服部とも昭和17年の春ごろにはほぼ閉鎖業務を完了した。

最後に残った手持ちの服地はひとまとめにして、神戸市内のテーラーにどうぞお越し下さいと連絡した。あちこちからの苦情に目をつぶり、地元神戸への最後の奉仕という気持であったし、ほんのそのくらいしか在庫はもうなかった。柴田の倉庫はキレイサッパリからになった。

当時、柴田から召集令状によって兵役についたものは15～16人ほどいた。

残品処理のとき、これらの社員が復員する際を頭において、最低限度の彼らの衣料を確保しておこうという動きが社内にあった。

これを知った高明社長は、そんなことは一切してくれるな、とそれを許さなかった。

ヤミもせず、物資隠匿もせず、というのはいまでもいえば簡単だが、当時としては稀有な潔癖さである。見事、なそしてあざやかな引きぎわだったとそれを知る人びとはいう。

ガラんとなった社屋をふり

返りつつ、100人を越した社員たちは故郷へ、あるいは満州へと三々伍々散って行った。

× ×

カーキ色の国民服、国民帽の間にチラホラと背広姿が復活し出したのは、昭和20年の終戦から2～3年経ってである。手に持つとズシリと重く肌ざわりのべつつく生地ではあっても、人びとはその型をなつかしみ、いとおしんだ。

昭和22年、注文洋服業柴田音吉洋服店は再開の一步をすべり出した。翌23年綿の統制令が解除され、24年には服地卸部を柴田商事株式会社として再開、服地輸入、卸業務を始めた。全国に散っていた元社員も三々伍々戻ってきた。

戦争中から引続いた衣類配給制度——「衣料切符」が有名無実となり、なくなったのはその後2～3年経ってからである。

「柄のついたドンゴロス」といわれる生地ではあったが、飛ぶように売れた時代である。

やがてガチャンと機を動かせば万円単位の金が入る——「ガチャン」の戦後繊維産業黄金時代を迎えることになる。

この柴田商事再開の年、柴田家には長男啓嗣君が生まれている。さきごろロンドンで6カ月、みっちり勉強してきた業界のエース。可能性いっ

ぱいの若者だ。

昭和28年、高明社長と同じく神戸大学を卒業した禎三氏が専務の椅子に座った。そして同年、東京都中央区八丁堀に榊柴音商店が設立された。

42年ドーマルフレイヤー社との合併による柴田ブリティッシュ・テキスタイル株式会社を設立。世界毛織物界を代表するドーマルの日本での大きな基地として不動の地位を築いた。ドーマルの名は、いま「柴田にとって偉大なる財産のひとつ」といわれている。

× ×

柴田商事の名を、いま知らぬ業界人はいない。資本金2,600万円、年商11億、従業員90名を擁し、市場分析力、企画力によってオリジナルな商品を市場に提供することで信頼されている。

音吉洋服店もまた神戸になくはならぬ店としての風格を保ち続けている。年商1億37人の従業員の陣頭指揮をとるのは、かつての名 Cutter 白崎治郎助の長男白崎皓介さんだ。

川田順、瀬戸内晴美さんの筆にもなったこの静かなたたずまいの店を愛する人びとは、神戸っ子だけではない。

そして——柴田の店で育かれ、巣立っていった人たちはいまでも年一回集まってはそのつながりをいつくしんでいる。(おわり)

岡 和子記者